

坂口安吾の未来

危機の時代と文学

宮澤隆義

危機の時代に安吾が甦る！

戦後、学生運動、冷戦終結、そして今日——

危機の時代に安吾の文学は繰り返し甦り、読み直されてきた。常に危機的な状況で、自らの「生きる術」を書き付けてきた彼は、自明なものが消え失せ、不透明な未来を抱える現代の私たちに何を伝えるのか？

Miyazawa Takayoshi
宮澤隆義

危機の時代と文学

坂口安吾の未来

坂口安吾の未来——目次

序章 危機の時代と文学 …………… 9

一 「墮落」について 9

二 逆説と矛盾 12

三 変化と個体化 18

第一章 ファルスの詩学——坂口安吾と「観念」の問題 …… 24

一 何が「観念」と呼ばれるのか？ 24

二 意味と行為 25

三 「純粹な言葉」と「実在」 29

四 ファルスという経験 34

五 変容への意志 38

第二章 ファルスは証言する——「風博士」論 …………… 41

一 事件の構造 41

二 ファルスは証言する 44

三 「可能の世界」が示すもの 47

四 「目撃者」の使命 52

五 接続される言葉 56

第三章 坂口安吾と「新らしい人間」論 …………… 59

- 一 一九三〇年代の坂口安吾 59
- 二 坂口安吾とソビエト——「新らしき性格・感情」 61
- 三 「環境」という問題圏 65
- 四 「理知」と「動物」——『吹雪物語』 70
- 五 転回——「ラムネ氏のこと」 80

第四章 「バラック」と共同性——「日本文化私観」論 …… 85

- 一 「バラック」という原理 85
- 二 「模倣」と「発見」と 94
- 三 「独自性」と共同性 100

第五章 情報戦と「真珠」…………… 105

- 一 日付と情報 105
- 二 長距離飛行の果てに 108
- 三 「本末顛倒」な歩み 113
- 四 真珠の粉 117

第六章 空襲と民主主義——「白痴」論…………… 122

- 一 「露路」と「掟」 122
- 二 空襲下における生 128
- 三 「火」と「太陽の光」 134
- 四 民主主義と主体化 139

第七章 「思考の地盤」を掘ること——「土の中からの話」… 146

- 一 坂口安吾と「土地」 146
- 二 中世と農地改革 148
- 三 「土地」の不気味さ 154
- 四 「思考の地盤」としての「土地」 160

第八章 暴力と言葉——「ジロリの女」をめぐつて …… 167

- 一 「ジロリ」の眼差し 167
- 二 「金銭」について 173
- 三 「家」と「秘密」 177
- 四 暴力と言葉 184

第九章 法と構想力——「桜の森の満開の下」論 …… 191

- 一 法の宙吊りのなかで 191

二 「市」と「魔術」	192
三 「無限」のネットワーク	199
四 切断と「桜」	204
五 小説と「蛇足」	208

第十章 「トリック」の存在論——「不連続殺人事件」とその周辺……

212

一 民主主義と統治	212
二 「推理」という行為	217
三 「トリック」の存在論	227

終章 来たるべき文学……

233

一 個体化と主体化	233
二 実存主義／主体性論争	235
三 新たななはじまりへ向けて	242

注 252

後書き 273

初出一覧 276

索引 281

凡例

- ・坂口安吾の引用は、『坂口安吾全集』全十七巻＋別巻一（筑摩書房、一九九八年五月～二〇二二年十二月）に拠り、表記はそれに準じた。また、ルビは適宜補った。
- ・引用文中の傍点は、特に断りのない場合、引用者による。
- ・引用文中の「」は、引用者の注記である。

序章 危機の時代と文学

一 「墮落」について

「余は偉大なる落伍者となつていつの日か歴史の中によみがへるであらう」。これは、坂口安吾が新潟中学の机の裏に彫つたとしてゐる言葉だ（「いずこへ」『新小説』一九四六年一〇月）。この逸話は後日の創作であるともされる。¹だが大事なことは、安吾が自らの存在を、ここで歴史の中にいつてもよみがえってくるものとして語っていた点だ。つまり「いまここ」のみならず、異なる時間、異なる場所における反復において現れてくる存在として、安吾は自らを刻みつけているのだ。これは、安吾を読むうえで極めて示唆的な言葉である。

戦後、坂口安吾がひろく読まれた時期は三回ほど訪れたが、それは一九四〇年代、六〇年代、九〇年代であったとされる。それぞれの時期は銀座出版社版選集（一九四七～一九四八年）、冬樹社版全集（一九六七～一九七一年）、筑摩書房版全集（一九九八～二〇〇〇年）の刊行期と重なっていたが、それぞれちょうど、戦争終結後の混乱期、学生運動の最盛期、冷戦終結後の国際体制の変動期にあ

たっている。その意味で坂口安吾とは、既存の体制が動揺・崩壊した時期に繰り返してよみがえり、読みなおされてきた存在なのだ。

それら各時期の読解の特徴は、それぞれ作家論的読解、実存主義的読解、他者論的読解といった方法論で考えることができるだろう。戦後長らく安吾は、「無頼派」のイメージを中心に語られてきた。³九〇年代以降の研究はむしろこの作家論的・実存的な生のイメージから脱却したところで安吾や太宰を読むとうと試みられてきたと言える。特に柄谷行人による読解は、坂口安吾における「他者」の問題を描き出し、その後の安吾の読み方を強く方向づけた。⁴

だが本書では、安吾の言説を改めてたどり直すことから、そこに存在する「主体化の契機」という問題を展開してゆくことを目指している。柄谷の安吾論において触れられていないのはこの点である。例えば、「墮落論」(『新潮』一九四六年六月)の記述を見てみよう。

戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きてゐるから墮ちるだけだ。だが人間は永遠に墮ちぬくことはできないだらう。なぜなら人間の心は苦難に対して鋼鉄の如くでは有り得ない。人間は可憐であり脆弱であり、それ故愚かなものであるが、墮ちぬくためには弱すぎる。人間は結局処女を刺殺せずにはゐられず、武士道をあみださずにはゐられず、天皇を担ぎださずにはゐられなくなるであらう。だが他人の処女でなしに自分自身の処女を刺殺し、自分自身の天皇をあみだすためには、人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ。そして人の如くに日本も亦墮ちきることが必要であらう。墮ちる道を墮ちきること

とによつて、自分自身を発見し、救はなければならない。

安吾が語る「墮落」とは、単純な「身を持ち崩す」という意味であつたり、樂園からの追放といったキリスト教的な意味合いで言われている訳ではない。「墮落」とは、個人や集団が無自覚に前提としている超越的な価値根拠から引き剥がされることであり、さらにはそこから「自分自身を発見」しようとする行為としてここで用いられている。ある者がどれほど非道徳的と見なされる行為を行つていたとしても、その行為がそれを行う者自身の価値根拠に対する批判となつていない限り、その行為は「墮落」ではない。「墮落」という言葉にこのような独自の意味づけがなされていることは、安吾特有の語法とも言えるが、ここで目指されているものはまさに「墮落」を通じた「主体化」の過程という問題であり、「墮落」とは「主体化」のための技法でもあつたのだ。

安吾の作品にしばしば見られるこのような独特の語法は、決して安吾の個人的な事情にだけ規定されている訳ではない。本書では、坂口安吾の書いたものを様々な歴史・社会・環境等々といった状況との交錯においてとらえ、世界的なパースペクティヴのもとに安吾の言葉を置き直してみた。文脈的には一見無関係にとらえられている要素同士を繋げてみることによつて、安吾が書いたものの可能性を新たに発見してゆくことを本書は目指している。それは、坂口安吾によつて書かれた言葉がどのような射程を持ちうるのか、という可能性の臨界点をも探る試みにほかならない。

二 逆説と矛盾

例えば、坂口安吾が作家活動をはじめた、一九三〇年代における問題の布置のなかで安吾を読んでみると、作家や思想家らが各自の立場を越えて共通に持っていたテーマが立体的に現れてくる。小林秀雄と中野重治と坂口安吾を並べてみることによって、各人の志向の在処とは別の水脈が浮かび上がってくることになるだろう。そこに共通しているのは、いわば「現実」に対する「言語」のあり方という問題意識である。

それぞれ見てみよう。まず、小林の「逆説といふものについて」〔読売新聞〕一九三二年六月八一〇日）を取り上げてみたい。

私の言ひたいのは、逆説といふものは、これを表現する人の態度によつて、その性格が大變相違して来るといふ点である。「中略」意地悪くものを見て意地悪く表現するより、率直にもものを見て率直に表現する方が遙かに難かしいが、率直にもものを見て必然的にその表現が逆説的になるといふ事には、もつと大きな困難がある。例へば「心の貧しきものは幸ひなり」といふキリストの言葉は、驚く可き率直が、極端な逆説となつて現れた典型であり、又眞の逆説の困難を語るお手本みたいなものだ。

眞の逆説の源には、つねに烈しい率直な観察がなければならぬ、割り切れない現実を直覚す

る鋭敏な知性がなければならぬ。逆説とは弄するものではない、生れるものだ。動いてゐる現実を動いてゐるがまゝに誠実に辿る分析家の率直な表現である。

小林は「割り切れない現実」それを「表現」しようとする、必然的に「逆説」を用いることになる。すでに一九二七年九月に「芥川龍之介の美神と宿命」（『大調和』）を発表した時点から小林は「逆説」を評価していたが、それらによれば、「現実」の複雑さを凝縮的に表現したものは「逆説」として表現されざるを得ないのである。さらにこの「逆説」は一つの文章のなかに無数の矛盾を織り込んでゐるため、一方向へしか向かわない「弁証法」を「矛盾」に当てはめて論じるよりもすぐれた言葉である、と評している。

この「逆説」のモチーフには、小林の私小説論において強調されている「二重の公共性」、すなわち私的言語と公共的な言語との「矛盾」という問題が表わされている、とする論者もいる。⁵⁾だがここではむしろ「率直」に小林の言葉を受け取つてみよう。「逆説」は「現実」の「率直な表現」である。そのことは、言語表象が「現実」を透明に再現するものとして決して機能しないことを意味している。小林は言語と「現実」の間に存在する、この「関係なきものの関係性」を「逆説」の論理として踏まえながら批評は書かれなければならないことを主張しているのだ。彼の独特の言葉遣いがこの論理に拠るところも大きいだろう。

しかし、中野重治はこのような小林の論理構成を同時代において批判していた。そもそも中野にとつて、現実における「矛盾」を意識化することは文学的にも政治的にも重要な使命であった。同

人雑誌『驢馬』(一九二六年四月―一九二八年五月)へ詩を掲載していた時代から既に、階級関係からとらえた社会的な「矛盾」の存在は中野にとって詩作の源泉にもなっていたのである。⁶⁾このテーマは、レーニン、スターリン、ブハーリンなどの理論と関係づけられ、史的唯物論の図式において主張されている。

言ふまでもなく、この矛盾が矛盾であるのは、そこに相對蹠する二つのもの、即ち一つにはブルジョアジーの支配関係に特有の、それ故にブルジョアの支配関係の存続のための要素と、二つにはブルジョアジーの支配関係に敵対するところの、ブルジョアの支配関係の破壊のための要素との、同居することを意味する。そして若しもプロレタリアート(ブルジョア社会の「悪しき側面」、ブルジョア社会の「禍害」、この社会の無条件的敵対者)の成長がブルジョアジーの破壊を結果するとすれば――疑ひもなくその通りであるが――このプロレタリアートの成長が、我々の今問題として居るこの芸術上の矛盾、その含む相對蹠する二要素の矛盾をますます鋭くすることは疑ひもない。(中略)正にここに芸術のなかに今や現れて来た矛盾の激化と、一般にプロレタリアートとブルジョアジーとの間に激化しつつある矛盾との関係が捕へられるのであり、言い換へれば、芸術がプロレタリアートによつて捕へられるのである。⁷⁾

中野はここで二種類の「矛盾」について語っている(「ブルジョワジーとプロレタリアートの間の階級的対立」としての矛盾と、「プロレタリアート内部におけるブルジョワ的傾向とプロレタリア

的傾向」との間の矛盾)。プロレタリアートはこれらの「矛盾」を激化させ、結果として「ブルジョワジーの破壊」へと至ることを目指さなければならない。この文章が収められている単行本『芸術に関する走り書』では、社会的矛盾から現れてくる芸術活動を、「世界を組織する一つの手段としてプロレタリアートの手に取りあげられ」る推進力として用いるべきことが主張されている。

中野は「大衆」や「プロレタリアート」という言葉によって、その階級に属する人間たちが自発的に持つはずの感情を互いに関係づけるべきだと考えていた。⁸ プロレタリアートは被支配と抑圧の結果、一般的に没個性的な人間の群れとしてしか見なされていないが、実際には個別的な無数の表情を持ち、社会関係の「矛盾」において引き起こされた怒りや悲しみの感情を抱えている。それらの感情を、組織されたプロレタリアートの編成に向かう情動として関係づけるのが詩人の使命であり、芸術としての詩はその意味でプロパガンダとして貢献できる、というのが中野の発想であった。詩において社会的矛盾が明確化されつつ、「大衆」の感情が結合され、連帯が生まれる。だが「大衆」の内には、プロレタリア本来のものとして見なされている「素朴」な感情の他にも、それと相容れないブルジョア的で自己保身的な感情がまだ存在している。それらの二つの感情の間で起こる「矛盾」において、階級意識を目覚めさせ、「大衆」を共産主義へと向かわせてゆくべきであると中野は唱えているのである。

このような、「矛盾」を露わにして突き詰めてゆく姿勢は、彼が転向後にも貫徹しようとした態度であった。それは「閏二月二十九日」(『新潮』一九三六年四月)における小林秀雄や横光利一の「無

論理性」に対する批判において典型的に示されている。

彼ら（小林、横光）の小説、批評、それから文学世界に起つたあれこれの事件についての身のふり方などすべてをとおして、彼らの文学的实践は全体として反論理主義、反合理主義として特徴づけられる。彼らは理性的なもの、理性的に考え行動することそのことに食つてかかつてゐる。しかしこのことが本質上理性的にはできないことであるために、彼らはやたらとヒステリックにわめいている。国民生活という規模で合理主義を「心得」ることのできなかつたわが国民の一部、なまけものの文学青年と一部の文学者たちがそれを崇め奉つて拝んでゐる。こういう反合理主義は、事の理非曲直を問わぬ、むしろそれを問おうとすることそのことにたいする鎮圧としての切りすて御免、問答無用、理性的に理由づけられぬ暴力支配の文学的・文学理論的反映にすぎない。

小林や横光に対する中野の批判は主に、社会的な関係における「矛盾」を、彼らが単なる言語の内部で処理してしまう手法に対してなされていた。論理が用いられてこそ「矛盾」も顕在化するのであり、非論理性的な処置によって「矛盾」の表現を抹消してしまうことは、中野にとつてまさに「暴力支配の文学的・文学理論的反映」であった。言語を論理的にとらえてゆくと必ず「矛盾」に目を向けるようにならざるを得ない、という点に中野は賭けていたのである。

小林の「逆説」への確信、中野の非論理性への批判。異なる両者は、ともに「現実」における「矛

盾」の意義付けをめぐって議論をしていた。小林は、言語が「現実」を無媒介に指示するのではないとして、そこに表現されるパラドクスの強度においてこそ「現実」を示そうとした。一方、中野は、論理において言語が露わにする「矛盾」のうちにこそ、社会的「矛盾」を原動力としたポエジーが生成すると考えていたのだ。

このように、「矛盾」や「逆説」という形で言及される要素をどうとらえるかという問題は、一九三〇年前後の日本において様々に共有されていたテーマであった。坂口安吾もまた、例外ではない。一九三二年三月発表の彼のエッセイ、「FARCEに就て」（『青い馬』）を見てみよう。

ファルスとは、人間のすべてを、全的に、一つ残さず肯定しようとするものである。およそ人間の現実に関する限りは、空想であれ、夢であれ、死であれ、怒りであれ、矛盾であれ、トーチンカンであれ、ムニヤムニヤであれ、何から何まで肯定しようとするものである。ファルスとは、否定をも肯定し、肯定をも肯定し、さらにまた肯定し、結局人間に関する限りのすべてを永遠に永劫に永久に肯定肯定肯定して止むまいとするものである。諦めを肯定し、溜息を肯定し、何言ってやんでいを肯定し、と言ったようなもんだよを肯定し——つまり全的に人間存在を肯定しようとすることは、結局、途方もない混沌を、途方もない矛盾の玉を、グイとはかりに呑みほすことになるのだが、しかし決して矛盾を解決することにはならない、人間ありのままの混沌を永遠に肯定しつづけて止まないとこの根気のほどを、呆れ果てたる根気のほどを、白熱し、一人熱狂して持ちつづけるだけのことである。

安吾はここで、文学における「ファルス」というジャンルを「途方もない矛盾の玉を、ゲイとばかりに呑みほす」ものでありながら、「決して矛盾を解決することにはならない、人間ありのままの混沌を永遠に肯定しつづけて止まない」ものと位置づけている。ここでは、小林のように単に言語の問題として「矛盾」が存在している訳ではなく、また中野のように弁証法的なものとして「矛盾」をみなしている訳でもない。いわば、「矛盾」を含む世界の現存在の総体を認め続けてゆこうとするところに、安吾独特の思考があるのだ。

この引用部分で安吾は、「ファルス」という文学ジャンル自体を独自に意義づけ、その「ファルス」こそ、無数の「矛盾」の存在をも肯定し続ける営為の表現であるとしている。「ファルス」のフランスにおける意味はそもそも単に「茶番劇」であるが、安吾はその「ファルス」という語にこのような固有語法的な意味付けを行ない、彼自身のその後の執筆活動においても反復してゆくテーマへと変化させていったのである。

三 変化と個体化

「ファルス」においては、「矛盾」を含む「現実」の総体が肯定され続けることによって、そこに関わっている「人間自身の存在」もまた変化してゆくことが重要となる。坂口安吾の文章において「人間」とは、決して全体として完結してしまうことがなく、絶えず既存の概念からの例外性や変則性を生み出しながら変化してゆくものとしてとらえられている。「人間」の変化というテーマに

ついでには後に論じてゆくが、安吾における「変化」というテーマが初期の「ファルス」である「木枯の酒倉から」（『言葉』一九三二年一月）に既に見られるという点をここでは指摘しておきたい。

「木枯の酒倉から」は、毎冬酒倉に通っている「瑜伽行者」の「俺」が、禁酒しているにもかかわらず誘惑されて酒に手を出していることを「僕」に語っているという作品だ。次に引用するのは、「俺」が、酒によって幻影を操る「瑜伽行者」を批判して語る部分である。

——愛する行者よ、鉢顛ハクテンヂヤリ闍梨の学説は不幸にしてイマヌエル・カント氏に先立つて生れたるが故にここにたまたま不運なる誤謬を犯すに至つたものであることを、余は尊公のために歎くものぢやよ。思うに尊公等岩窟断食の徒は人間能力の限界について厳正なる批判を下すべきことを忘却したために、浅慮にも人間はつまり人間であることを忘れ恰も人間は何でもない如くに考え或は亦人間は何でもある如くに考えるのぢやよ。さればこそ尊公は酒と人間との區別を失ひ、酒は尊公の肋骨であり尊公は酒の肋骨……うむうむ、であるなぞと考えるのぢや。げに恐るべき誤謬ぢやよ。（『中略』見よ。余の如きは理性の掟に厳として従ふが故に、ここに酒は茨となり木枯はまた頭のゼンマイをピチリといはせるのだけでも、余は亦理性と共に人間の偉大なる想像能力を信ずるが故に、尊公の幻術をもつてしては及びもつかぬ摩訶不思議を行ひ古今東西一つとして欲して能はぬものはないのぢやよ。

ここで「イマヌエル・カント氏」に言及しながら、「人間能力の限界について厳正なる批判を下す